

西條八十の野郎が、・・・・・・・・

その一

「西條八十の野郎が、余計な読み方をするものだから、いちいち訂正するのが煩わしくてかなわん」、とある男が怒る。

何のことかと言えば、「サムライ日本」という流行歌がある。「人を斬るのが侍ならば、恋の未練がなぜ切れぬ。・・・・・・・・新納鶴千代、苦笑い。」である。このとき、**新納**をきちんと読めばいいものを4音だから、シンノウと読ませた。これを怒っているのである。中途半端にヒットしたものだから、みんなシンノウとしか読まない。新納はニイロと読みます。

豊臣秀吉が、薩摩征伐におしよせたところ、新納武蔵守忠元という知勇兼備の豪傑が最後まで徹底抗戦を主張した。結局は戦いに敗れたのであるが、占領まではされなかった。新納武蔵野守は、「武勇は鬼神の如し」と呼ばれた。何かの戦で勝敗がつかず、一対一で戦って勝利した。・・・・・・・・その後、薩摩の大口の地頭になった。肥後の国に近いところで、国境警備の意味もある。

ところで、大口は、ボクが尊敬する歴史小説家の海音寺潮五郎氏の生まれ在所である。戦争中に海軍に召集され、家伝の胴田貫を持って行った。はしごをふみはずして岸壁と船の間に落ちてしまった。このとき、「者ども、静まれ！」と言ったという。この大口村には、新納という姓が今でも残っている。武蔵の守の子孫だろうか。・・・・・・・・この時、こちらにもう少し知識があれば、詳しい話を聞いたのに、惜しいことをしてしまった。

その二

薄幸の詩人、金子みすゞを、世に出すように初めは親切にしていた。たとえば、自分が主宰をしている詩集雑誌では、「若き童謡詩人の巨星」と持ち上げている。ところが、会ってみると、暗い雰囲気、ややみすぼらしい感じの女性であったことから、予想外だったのだろう。みすゞの手書きの詩集が三冊送られてきたときから、態度を一変し、邪険に扱いだしたのである。なぜか？ 「嫉妬心」からであろう。自分は、ひとつの詩を作るのに四苦八苦している。ところが、みすゞは、泉が湧くが如くに大量に詩をいとも簡単に量産する。この手書きの三冊の詩集は、西條の死後、家人が探したがみつからなかったという。・・・・・・・・捨ててしま

ったのだろうか。

50年後にひょんなことから発見され、矢崎節夫らの苦心から日の目をみるようになった。之より以前に福田正義がすでに発見していたが、一地方紙だったことから、全国的に知られることはなかったらしい。

矢崎らの「金子みすゞ著作保存会」は、著作権を入手しようとするなど、嫌な噂が流れたりしているようだが、もともと西條八十が無視しなかったら、こんな騒ぎにはならなかったはずである。あたら、優れた才能を抹殺してしまった罪は問われてもいい。わずか26歳で、その才を自ら捨てたみすゞの無念を思うと……。今読んでも、生き生きとした溢れ出る才能が伺えるものである。